

# 小さな仲間

1958  
作品ナンバー0017

文部省選定 1959年産経P R映画祭銀賞

〔推薦〕 青少年映画審議会 中央児童福祉審議会 結核予防会 保健同人 日本PTA協議会 日本青年団協議会 全国地域婦人団体連絡協議会

当時、子供の結核患者は全国に48万人もいると推定されていた。これら子供の結核は、ほとんど大人から感染していた。この映画は、『お母さんの幸福』の姉妹編として、子供を結核から守ることを訴える児童劇映画として作られた。



健ちゃん、やっちゃん、三ちゃんの5歳と6歳の小さな仲間は、今日も一日遊びに夢中だ。好きな遊び場は、駄菓子屋である健ちゃんの家のお店だ。店番をする健ちゃんのおじいさんはゼンソクで、実は肺病らしいと噂が立つ。やっちゃんのお母さんも三ちゃんのお母さんもあわてて健ちゃんの家へ遊びに行くのを禁じた。診療所の杉山先生から、おじいさんはやっぱり胸がよくないといわれ、その上可愛い健ちゃんにも感染していることがわかった。健ちゃんのお母さんは途方に暮れるが、杉山先生の意見で、まずおじいさんを入院させるために生活保護を受ける努力をした。そして子供は空気のいい自分の生まれ故郷へあずければと思う。

3人の小さな仲間は、近所のおじいさんから肺病にはマムシの黒焼きがいいと教えられ、へび屋へ行くが、気味が悪いのであきらめた。帰る途中、ビルの上に美しい夕焼け雲を見つけた。3人は、非常階段をのぼってビルの屋上へ上がり、健ちゃんが田舎へやられなくてもいいようにいい空気を吸わせた。日が暮れると下界では大人たちが大騒ぎ。しかし、助けおろされた子供たちは大はしゃぎ。この無邪気な子供たちの行為に胸をうたれた人のいい下町の人々は、駄菓子屋一家にはじめて温かい手をさしのべる。

劇  
35ミリ  
白黒/50分

- 企画  
第一製薬株式会社
- 監修  
浅野秀二

スタッフ

- 製作  
村山英治  
村山祐治
- 脚本  
堀内 甲  
刈谷海夫  
勝目貴久
- 演出  
堀内 甲
- 撮影  
荒牧 正
- 音楽  
草川 啓

- 出演  
健一： 春日井広往  
健一之母： 川上夏代  
おじいさん：  
中村栄二  
安夫： 鈴木秀明  
三吉： 十万幹雄  
他